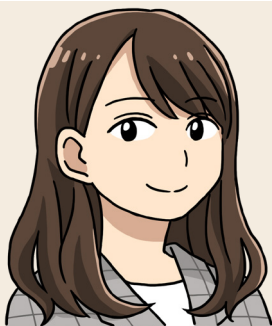


# 人の暮らしや命にかかわる仕事がしたい —— 失敗や遠回りの先にみえたこと

筑波大学医学医療系准教授、博士（保健学）  
大宮 朋子



2023年7月



— 幼少期や学生時代はどんな子どもでしたか？

本を読むのが好きで、国語や社会、特に英語が得意でした。好きなものは音楽で、家にあったクラシックのレコードをよく聴いていました。高校には、吹奏楽部が強かったという理由で進学しました。当時は、東京交響楽団の先生に師事していて、県のアンサンブルコンテストで金賞を取ったこともあり。卒業後、英語が得意だったという理由で英語科に進学しました。その後、女性が長く働ける

**大宮 朋子（おおみや ともこ）さん**  
埼玉県出身。筑波大学医学医療系准教授、博士（保健学）。英語科卒業後、企業に就職するも友人との別れをきっかけに大阪大学医学部保健学科看護学専攻に入学。その後東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻に進学。在学中に2回出産を経験。専門は公衆衛生看護学、健康社会学。趣味は、フィギュアスケートと猫をなでること。

— 自身の研究テーマを決めたきっかけなどはありますか？

元々は営業職に就いていましたが、当時身近で起きた出来事をきっかけに「もっと人の暮らしや命に関わる仕事したい」と思い、看護学の道へ。

そこでの出会いが「看護が好きという思いの原点になりました」

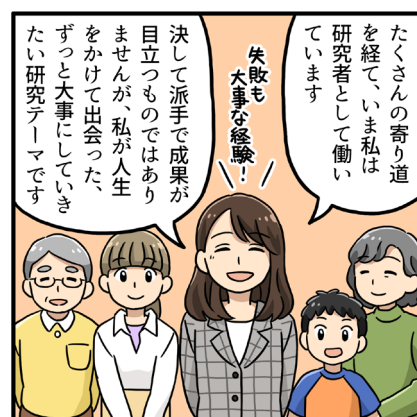
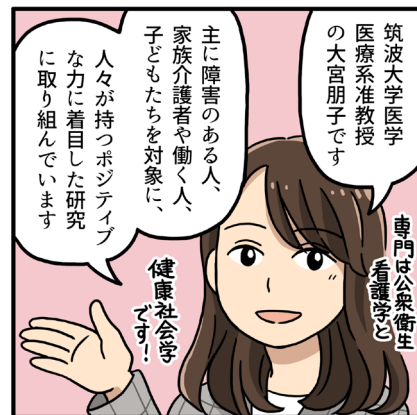
「からどろー、試験勉強さ、大学では温かい友人たちに恵まれました」

「失敗も大事な経験！ 決して派手で成果が目立つものではありませんが、私が人生をかけて出会った、ずっと大事にしていきたい研究テーマです」

企業に入社したときの同期を3人亡くしてしまっていて、その時に「ずっと働き続けるなら、人の暮らしや命にかかわる仕事がしたい」と思い、無謀にも医師になろうと大学受験を決心しました。結果的には、看護の道に進みましたが、亡くなった同期のお母様の悲しみを目の当たりにして、若い方が亡くなるってこんな辛いことなんだなと苦しくなった経験を振り返ると、社会に生きる人々の生活、生命、生き様、心と体の健康に深くかかわる保健学・看護学が研究フィールドになったのは必然だったのかなと思います。

— 文系科目が得意だったそうですが、今の研究に力になっていないと思いませんか？

看護は医療系に分類されますが、人と向き合う分野なので感情や人間関係などへの理解が求められていると感じています。もちろん、科学的な素養も必要ですが、文系的な素養も今の研究の力になっています。世の中のほとんどのものは計算式だけでは出ず、特に人を相手にしているものは正解がないです。そのため、ベースには理系の知識を持ちつつ、そのなかで人の営みをどう解釈してケアしていくかという両方の視点がないと難しいなと思います。



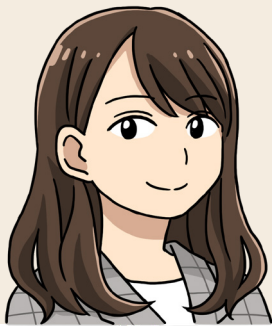
# 人の暮らしや命にかかわる仕事がしたい

## —— 失敗や遠回りの先にみえたこと

筑波大学医学医療系准教授、博士（保健学）  
大宮 朋子



2023年7月



「研究をされていて辛かったことなどはありますか？」  
私のアプローチ方法が良くなかったのですが、「あなたの研究のために私たちを使うのか」と言われたことです。大学院に進学して最初に行った研究は、先天的な障がいを持って産まれてきた方を対象にした研究でした。難しい状態で生きる中で、自分を持ってしっかりと「これで大丈夫」と生きている方がたくさんいました。そうした中で、「どうしてそうなれたんだろう」という問いを解き明かすところからスタートしました。研究者として未熟だった私は、電話で研究協力のご依頼をお伝えしてしまいました。しっかりと、会いに向いて思いを伝えなければならなかった、もともと人とかかわりを大切にすべきだったと反省しています。

「このことをきっかけに、研究って何だろうと問い直すことができました。研究者は、けっして自分の業績のためだけにやるのではなく、研究成果を世の中に還元していかないと意味がないと深く心に刻まれています。この経験から、研究結果は必ず研究にご協力いただいた方々に返すようにしています。」  
「この経験をもとに、工夫した点などはありますか？」  
対象者の方には誠意を尽くさないといけないと思えました。その後も、シビアな状況に置かれた方を対象とする研究を行ってききましたが、どういう風なことを明らかにしたくて、何を社会やみなさんに還元したくてやっているのか自分の中に落とし込んでおかないと伝えられないし、透けて見えてしまう。例えば、何か話された際に「分かります」といっても、「あなたが分かるの？」と返されたらぐうの音もでないですよ。そこを認識したうえで、それでもあなたの話を聞かせてくださいという姿勢で行かないと失礼だと思っています。

「進路に悩む若い世代のみならず、大谷翔平選手のように目標を掲げて努力していく方もいると思うのですが、私は真逆で自分が今研究者をしているとは思っていませんでした。ですので、自分が何になるのかを早くから決められないことを恥ずかしいと思うことは全くなくて、自分の好きなことと向きあうてほしいです。自分で決めたことは、「あそこまで悩んで決めただから……もういい！」と吹っ切れて考えられます。学生の時からそこまで思いつめる必要はありませんが、「心がうごくこと」「ズキーンとくること」をなんで？どうして？と思うんだろう？と突きつめていくと、振り返った時には道ができていくかもしれない。

月並みですが、人と比べすぎず、回り道や失敗をむしろ喜ぶぐらいでいてほしいです。山ほど失敗をし、遠回りをしてきた私が確信を持って言えることです。今では、その失敗さえも「おいしい」経験だった、とさえ思えます。心から応援しています。

